

---

# 初音ミクの物語

水瀬藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初音ミクの物語

### 【著者名】

NZマーク

水瀬藍

### 【あらすじ】

今までない時、ここでない場所。

芸術の最盛期にあつた世界で、ボーカロイドは生まれた。

音も言葉も声も、それだけでは何も救いはしない。

けれど、「本当の歌」は、きっと何かを救うことが出来るだろう。

## プロローグ

夢を見た。

夕焼けの彩る世界が美しかつた。  
全てを塗りつぶすような鮮やかな赤の空が  
いや、違う。何時か何処かで見た光景。  
至るところで上がる火の手。逃げ惑う民衆の嘆き。  
街が、燃えていた。

遠い日の記憶だ。

いつの時代も、小国は容易く滅ぼされる運命にある。  
そのことに不条理を感じても仕方が無い。  
滅ぼすための剣でしかない自分は、与えられた任務を機械的にこ  
なすだけ。

燃え盛る居城に、足を踏み入れる。

包囲された城のなかには、まだ人がいた。主を含む王家の人々が。  
しかし、脱出する様子は見受けられない。  
彼らは知っている。生き残れば、また争いが起きるだらうことを。  
だから自ら、国とともに幕を引こうとしているのだ。  
ふと感傷に浸る自分を見つけ、戒める。

同情をしたところで、彼らを救うこととは出来ない。

確信をもつて通路を奥へと進む。後宮の中央、大広間に誂えられ  
た舞台。

歌姫が、そこにいた。

年の頃は十七、八といつところだらうか。  
少女と女性の狭間の、独特的の儂い危うさを纏っていた。  
しかし瞳に宿るのは、誇り高く力強い光。

哀しみを湛えながらも、決意とともに燐然と輝いている。

彼女はこちらに気がつくと、臆することなく真っ直ぐな視線を向けた。

年下の少女の視線を受け止め、足を止める。

外壁の崩壊する音が、内部にまで伝わってくる。

もう終演は近い。あとは王家の人々、そして歌姫の行く末を見届けるだけ。

一瞬、言ひようの無い感情を込めた彼女の視線が絡まり、逸らされた。

そして、彼女は歌う。

慈愛に満ち溢れた歌声を、惹かれやつてきた精霊たちが街へ届ける。

人々の哀しみを癒しながら、切なくも優しい旋律が世界を流れていた。

歌姫を護るように、あるいは讃えるように、精霊たちの輝きが溢れだす。

どうして歌姫を魔女といつて畏れるのだろうか。

これほどに人の心を動かす術が、他に思い当たらない。

精霊たちに祝福されながら、炎が彩る舞台上で想いを紡ぐ歌姫。奇跡が途絶えるそのときまで、彼女は歌い続けていた。

### 【1・1】 アナタとカノジョ

「もしもーし！ 朝だよ、起きるー！」

カーテンがレールを滑る爽快な音とともに、高く澄んだ女の声が意識下に響く。薄目を開くと、眩い陽光が室内を満たしていた。ベッドの側では、いつものように同居人の声が腰に手を当てて立っている。

「ほら、今日も朝早いんでしょう？ わたさと起きるー」

「ううん…… もお、あさあ？」

毎度のことだが、眠りについた時間が遅かつたせいで身体全体がだるく、脳内も霞みがかっている。すぐには浮遊感から抜け出せそうにも無かった。

「そうよ、つていうか。キモイ声だすな」

「んー、ちょっとだけえ……」

寝ぼけ眼の俺は、横たわったまま返事をすると、布団を被りながら寝返りをうつた。

「一度寝もあるな！ まったく、もう」

動かない頭で漫才半分の怒りと呆れた溜息をなんとか認識して、視線を望に固定する。

肩で揃えられた艶のある黒髪。ぱっちりとした意志の強さを感じさせる瞳。瑞々しくも柔らかそうな唇。成人したばかりの小姑娘だが、顔立ちも少女のそれではなく女性らしさを印象づけるようになってきた。いわゆる「いい女」に近づいている気もある。

「……お前、綺麗になつたな」

「ええ？ な、なによ。寝ぼけてるの？」

唐突な褒め言葉に焦る。だが口説いているわけではない。自分でも、何を言ったのか分かっていないのだから。ということは、やはり

「……つるぺた」

寝ぼけていた。

「つ！一生、寝てなさい！！」

「ぐあつ！？」

振り上げられた鋭い何かが、俺の無防備な腹筋を破壊した。

望が朝食を作っている間に一通りの身支度は終えて、悠々と食卓に着く。いつもよりも余裕のある時間。だが代償は大きかった。負傷した腹部がまだ、鈍い痛みを訴えている。

「つたく、俺が低血圧で朝に弱いこと知ってるだろ？ 少しは手加減してくれ、お前の蹴りは尋常じやない」

焼いたトーストにマーガリンと葡萄のジャムを塗りたくりながら、向かいに座った望に文句をぶつける。だが望は、自分こそ被害者だという顔をして俺を睨みつけてきた。

「あのね、寝言でも言つちやいけないことがあるでしょ。因果応報つてやつよ」

「だからって、ここまで……今日は何やらかしたんだ？」

我ながら情けないが、寝起きの行動は全く覚えていない。日常的な応酬とはいえ、望のかかと落としの威力によつて、度合いは分かるものだ。今日のそれは相当だった。もしも酷いことをしてしまつたのなら、きつちり謝らなければならぬかも知れない。

「……あたしの尊厳に関わることよ」

「なんだ、それは？」

「いいから、気にしないで！」

話は終わりとばかりに苺ジャムを満面に塗つたトーストを口にした。望はマグカップを手に取つた。しかし、もやもやとした気持ちが治まらない。はつきりしないことに、俺は後味の悪さを感じていた。

「だけどな……」

「これ以上、傷口に塩を塗つてむような真似をしたら

「……したら？」

怒りで顔を朱に染めながら、田の据わった望は暴走し始めた。

「 女の子の恥ずかしい告白を大胆な歌詞にして、

新型の量産したボーカロイドに覚えさせて、

お披露目と称してコンサートを開催したあげく、

生中継で電波にも乗せて、

でもって全部あんた名義で、

なおかつ強要されて歌詞を書かされたんですう、

なんてモザイクかけてニコースで証言して、

口リコン！ ニート！ 甲斐性なし！

つて三拍子揃ったキャッチフレーズが付くようにして、  
それでもって大人の都合作品集なんて作つて、  
世界中に無料配布しちゃつて、

知名度ドンよ！？

「 ……頭、大丈夫か？」

早口で捲したてる突飛すぎる話に、本氣で心配になる。望のほう  
が恥ずかしさのために頬を紅潮させているのだが、それでも言葉は  
勝手に溢れでてくるようで、訳の分からぬ流れになつていた。現  
実のものとなつたなら、確かに恐ろしいが。

「 いいえ、それだけじゃ済まらないわ。  
夢見る乙女の純情を踏みにじつたんだし、

あんたのせいで未だに生娘なんだし、  
だからあたしは売れ残りで既に萌えがないのよ、

つて、ちつがーう！？」

「 ……大丈夫か？」

「 はあ、はあ、はあっ

混沌とした混乱のなかで、よつやく自制が効いたらしい。望は言  
葉を止めて荒く息をすると、俺を真つ直ぐに見据えて言い放つてし  
まつた。

「 と、に、か、くー 一度と、つるぺたつて言つなあー！..」

「 ……

「……あつ

「二人のあいだの熱が、一気に冷めるのが分かつた。わずかに涙を浮かべる望を視界に映して、そして背筋を凍らせるほどの予感に苛まれて、ぎこちないフォローを試みる。

「まだ気にしてたのか……それは、本当に悪かつた」「普通すぎて全く効果がなかつた。

「つー もうやだあー！」

「ちょっと待て、どこ行くんだよ！」

「止めないでっ！ あたしは郷里に帰るのーー！」

それから望をなだめるのに、一億と一千年くらいい費やしたとか費やさなかつたとか。

「結局、いつもの時間じやないか

「ごめ つて、悪いのあたしだけ？」

「いや……俺も悪かつたけどさ」

「はあ、なんだか疲れちゃつた

「……同じく

朝食を済ませて、ソファでぐつたりとする一人。外の賑やかさに反比例して、穏やかで静かな空気が流れる。チクタクといつ音だけが規則的に響き、望は壁時計を見やつた。

「時間、平氣なの？」

「慌てるほどじゃない。家を出る前に少しだけ作業しようかと思つたんだが……早起きは無謀だつたな」

「まったくよ。今朝みたいなのは、もうごめんだからね  
お互いの溜息が重なつて、小さな苦笑がこぼれる。散々に暴走して、気が済んだところもあるのだろう。すつきりした表情をしていて、俺はひそかに安堵していた。

「そういえば、また王宮から書状が届いてたみたいだけど……例の話なんですよ、受けないの？」

望のいう例の話というのは、秘密裏に開発されているANDROIDイ

ドに歌を唄わせるという試みなのだが、単なる娯楽目的ではない。精靈の力操る歌姫の奇跡を再現しようとする大掛かりなプロジェクトだった。

「受けた結果どうなったか知ってるだろ?」

「そうだけど、今度こそ」

「所詮、機械は機械だ。歌姫にはなれない」

「……歌姫は、もう居ないんだよ?」

望の一言に沈黙で応える。俺自身わかつていいことだが、そう簡単には消せない傷がある。だから機械には無理だと決めつけ、言い訳を作つて逃げているのかもしれない。そう理性で分析をしても、行動には移せなかつた。

「また本当の歌、聴きたいなあ」

「……ディスク貸してやろうか?」

「もうじゃなくって!」

はぐらかそうとする俺を咎めるように声を上げる望。それならばと、本音ではない理由で深入りを避けようとする。

「わかつてるよ……でもなあ。こまのとこ、歌えそうな奴が居ないんだよな」

「ふうん」

納得していなさそうな相槌を打つ望。仕方なく、少しだけ考えていたことを口にする。

「あのむ、お前は唄わないのか? そいらへんの歌い手に比べれば格段に上手いんだし、身近で手っ取り早いってのもあるが、お前なら本当の歌も」

「本当? あたしになら本当の歌、唄える?」

「ああ、保証する

「そつかあ」

望は嬉しそうに表情を緩めて、しかしそくに正体のわからない陰を見せる。

「でも、『めんね。やつぱり作詞家としての仮歌だけで十分よ。歌

いたいって衝動があるわけでもないし

「どうか、勿体ないな」

「いいのー。ほら、頼まれてたやつ」

言って立ち上がると、望は側の棚に置いてあつたティスクを手に  
とつて寄越した。

「相変わらず仕事はやいな」

「そう? 出来が伴つてないかもしないけど」

「そんなことないだろ、お前の詞は良いよ、凄く」

「あ、ありがと」

柄にもない褒め言葉に一人とも黙つてしまつ。

「そろそろ時間かな」

わざとらしく時計を確認して立ち上がると、望も背中をぽんと叩  
いて言つた。

「ほら、行つてらっしゃい」

こつものよつに望の言葉に見送られて、俺は家を出た。

## 【1・2】 めぐりあい

暖かな光を届ける太陽が堂々と空に上る頃、街は活気を魅せ始める。夜中の平穏な静けさと対照して、朝市に始まる街の賑わいは世界でも随一だろう。

ここは王国の城下町、フィーネリア。先進国家として栄える一方、身分に関係なく創造に励むことのできる芸術の都としても有名である。

それは先年のクレス公国の滅亡により、音楽の中心が王国へと移ったことも関係しているのだが、元から絵画や建築という分野では隆盛を極めていた。むしろ音楽は、伝説の歌姫を失つた現在では次第に影響力を弱めている。

街を南北に縦断する大通りに出ると、ますます喧騒は大きくなつた。早朝は稼ぎに出る男たちで一杯になる路面列車の始発駅を通り過ぎ、そびえ立つ白銀の大聖堂を横目に進むと、王宮の前門に辿り着く。

白を基調とした淡い色彩が中心の王城は、訪れるものに威圧感ではなく感動にも似た何かを感じさせる。設計の段階から多くの芸術家が参加していたらしく、芸術の都ならではのアートが、城壁や内装、庭や塔、区画の隅々まで見受けられる。

俺は門番に身分証を提示すると、『ぐ当たり前にのように城内へと立ち入つた。赤絨毯を進み、まずは客間へ。そこで取次ぎをしてもらい、謁見の間へと通される。

全く畏れ多いことではあるが、対応の迅速さからして、俺が特別に優遇されている部分はあるのだろう。しかしながら基本的に女王は寛大な施政者で、暇があれば誰にでも謁見を許すし、身分不相応な意見を聞き入れたりもする。

女王からの直々の召喚で来たわけだが、俺に作曲家としての名誉があるなどと驕つたりはしていない。逆に申し訳ないほどで、なん

とか力になりたいとは思つたが、黒い噂もある歌姫計画には賛同しかねるのが、正直な考えだった。

「お客様がお見えになりました！」

「どうぞ、お入りくださいませ」

おつとりとした口調でありながら、威厳をも兼ね備えた女王の声を受けて、俺は大扉をくぐつた。

数分後、何故か俺は女王の後について裏庭に面するテラスへ向かつていた。

直接に訊ねることは出来ないが、一人きりで話したいということなのだろうか。謁見の間を出る際に冷ややかな視線を送ってきた側近の表情を思いだす。それだけで気分が悪くなつてきた。

「風が、気持ちいいですわね」

女王の咳きに我に返ると、前方のテラスから吹き込む心地よい春風が感じられた。外へ出て、端のほうまで歩き、足を止める。衣装のことなどお構いなしに城壁に寄りかかった女王は、俺がくつろいだのを見て話しあじめた。

「さて、早速ですけれど。お話というのは、先日お願ひしたボーカロイドの件です。その様子ではござ承知のようですが、どうかお願ひできないでしようか？」

知らず知らずのうちに、軽い溜息が口をついていたらしい。失礼なことをしてしまつたと反省するが、だからといって引き受ける話ではない。

「先日もお返事はしましたが、丁重にお断り致します」

「どうしても、ですか？」

「……前回で十分に懲りましたし、そもそも俺には荷が重い話です。機械工学の知識もありません。音楽家としての経験値も足りません。俺よりも適任が」

「それでも貴方にしか任せられないと、わたくしは考えていました」

強烈な言葉で返事を遮られて、俺は黙り込んでしまった。それがどんな感情からか言い表すことは出来ない。ただ、女王に認められたという誇りのようなものはあった。

「貴方の曲には、心があります。

笑顔があります。愛情があります。

哀しみがあります。涙があります。

何物にも染まらない、強い意志があります

夢を語る少女のような横顔を、俺は阿呆のように見つめてしまつた。女王の純粋で真剣な想いが痛いほどに伝わつて、そして期待されることを嬉しいと思つてしまつた。

「もしも歌姫が貴方の曲を唄つていたなら……そのように夢想すれば、実現させてみたくもなります。ただの理想かもしませんけれど、誰もが幸せになれる世界を夢見たいとは思いませんか？ わたくしは、叶さまの最後の精靈歌にも同じような願いが込められていたように感じました」

誰もがそう思つただろ？ あの日、あの時は。だが歌姫は失われ、人々の心から消え去るうとしている。誰かが平和の祈りを奏で続けなければ、危うい世界は崩壊してしまつ。

普通ならば喜んで受けていい話だ。本当の歌が唄えるかどうか、そんなことは関係なく挑戦していいはずだ。こんなにも素晴らしい称赞を与えて貰つたのだから。

だがやはり、過去の記憶と罪の意識が何処かで引っかかっている。歌姫が失われた原因でもある自分が、歌姫を蘇えらそうとしていることが皮肉に思えてしまう。

「……申し訳ないのですが。もつ一度、お時間を頂けないでしょうか？」

「それは勿論ですわ。搖らいでくだけでも、嬉しく思います。本心を伝えることができて良かつた」

「女王は、どうして音楽に執着なさるのですか？ フィーネリアは

音楽がなくとも、芸術の都としての地位は確立しているでしょう。「わたくしが音楽を愛しているから、という理由ではダメでしょうか？」

「いえ…… そうですね。それでは、どうして歌姫にこだわるのですか？」

歌姫による精霊の調べが失われた現在、音楽の分野では教会の先導する聖歌が広まりつつある。不安定な世の中で、信仰と芸術の利害が一致した結果だ。聖歌も精霊歌に見劣りのしない影響力があり、まだ過渡期ではあるが、次第に音楽の主流になっていくだろうと予想されていた。

「どうして、といつほどの理由ではありませんけれど。ふたたび精霊歌が聴きたいと、そう願っているだけですわ。ただわたくしがそれを出来うる立場について、そして叶えたいと思うから行動する。それだけのことです」

事も無げに言い切って、女王は微笑んだ。

「こ」の答えでは、「ご不満でしょつか？」

「いえ…… そういうわけでは」

失礼な話だが、女王にも俗人のような一面があるのだと知つて驚いただけだった。願いがあり、望みがあり、欲があるので。女王の精霊歌に対する想いは、公務に私情を挟むほどの情熱なのだろうか。素直に、真っ直ぐに進めることが羨ましくもあった。

「お聞きしたいことがありますけれども、まだ何かありますて？」

軽く首を振ると、女王は城内への入口に足を向けて言った。

「そうですか。それでは、最後に　わたくしがご案内致しますので、一目だけでも見て頂けませんか？　新しいボーカロイドを」

普段は滅多に人が立ち入ることのない区画、後宮のそらに向こう側。本宮に比べると、全くといっていいほど飾り気のない神殿様式の建物で、表からは見えないせいか存在自体を忘れ去られたような

場所だつた。足音が吸い込まれるように奥へと響き渡り、残響を置いて消えていく。

「いらっしゃるですわ」

女王が手をかけた扉の向こうから漏れ出す音に、俺は思わず息を呑む。

『ラーラーラーラーラー ラーラーラー<sup>1</sup>  
ラーラーラーラーラーラーラー』

衝撃だつた。一般的の歌い手には無理のある澄み切つた高音の伸び。歌姫にしか唄えないだろうと、そう思いながら作り上げた曲の、最高音部分がとてもなく安定して

『アーアーアー

アーアーアーああ～？』

訂正。まだまだ不安定なところもあるようで、急に調子の外れた音に思わずこけてしまいそうになる。隣で女王がクスッと笑つたのが分かつた。

真鍮の扉を開いて聖堂に入ると、歌を中断した彼女が、あまりにも自然な嘆息をついてこちらを振り向いた。

「あつ……」

エメラルド色のつぶらな瞳が、初めに女王を見留めて、そして驚いたように俺を見つめる。青緑色のツインテールが揺れて、ステンドグラスから降り注ぐ光の粒子を反射した。

「お邪魔して、ごめんなさいね。様子を見に来ただけですから、お構いなく練習してくださいな」

来賓に対するものと変わらない女王の丁寧な言葉に、彼女はぺこりとお辞儀をして再び歌の練習に戻つていく。一瞬、戸惑いのような視線が向けられたように感じたのは、果たして気のせいだろうか。慈しむように彼女を見つめる女王に、俺は問いかける。

「本当に、あれが？」

確かに見た目だけなら旧型も人間らしくはあった。しかし言葉を話すというのは大変なことで、どんなに改良を重ねても流暢に喋る

」ことなど出来なかつたし、ましてや歌うことなど夢のまた夢だつた。

それなのに彼女は　ボーカロイドを否定してきたなかで、あつさりと認めたくはないが　歌姫に近いものを秘めていた。

「ええ。心というものは、本当に大切なものですのね。あの子も、知能と感情の両方を備えて、初めて歌えるよつになつたのです」

「それに、あの曲は　」

「貴方にしか任せられないと、そう感じたのですから。貴方の曲を練習させるのは当然のことじょう?」

あたりまえのように女王は言つて、小さく単語を呟いた。

「初音ミク」

「え?」

「あの子の名前ですわ。音楽の未来を切り開く、初めての音になることを願つて。わたくしが名付けました。素敵だと思いませんか?」

「……やっぱ、ですね」

苦笑混じりの俺の返事でも満足したのか、女王はふわりと微笑んだ。

「先ほどのお話どおり、お返事は後日で構いませんわ。それでも、あの子は貴方に託すことにします」

聖堂をでて謁見の間へと戻る道すがら、女王はそんなことを言い出した。

「しかし……」

「あの子の歌姫としての可能性を、貴方も感じたでしょ?　思うようにやつてみてくださいませ。一いちばんの迷惑など気にしなくとも構いません。歌姫計画で何が起つひど、あの子と貴方たちは必ず守つてみせますわ。それが、わたくしの役目。唯一、お力になれることですから」

女王の言葉、想いが信じるに値するものだと理解して、とりあえず俺は頷いた。

「もし、未だに引っかかりがあるのなら……」

俺が表情を暗くしたこともお構いなしに、女王は続ける。

「お会いにならねたら如何ですか？ きっと叶さまも心待ちにしていると思りますわ」

奇跡の歌声が、記憶の底から聴こえてきた気がして、かすかに胸の奥が痛んだ。

女王の勧めもあつたからか、俺は王宮を出たあと皿やには戻らず、郊外の寂れた一角に足を運んでいた。ミクは最終調整を終えて送られてくるらしいが、家には望がいるので心配ないだろう。

街の喧騒からは遠く離れた、自然を囲む丘陵に建つ一軒の家。クレス公国の滅亡から四年。彼の地で失われた歌姫は、世間から隔離されて現在はひつそりと暮らしている。

コンコンッ。

木製のドアをノックして暫く待つ。来訪に対する返事は聞こえないが、近づいてくる気配を向こう側から感じた。そして、開かれたドアから覗く端正な女性の顔。

「久しぶり、だな。叶……」

突然の珍客に、叶は素直な驚きと喜びを表情に浮かべて、俺の手を取った。

俺をリビングに招き入れてソファに座らせると、遠慮をする間もなく叶はキッチンへと向かった。お気に入りの紅茶でも駆走してくれる気なのだろう。楽しげに揺れる長い黒髪が、久々の邂逅を嬉しく思ふ叶の気持ちを伝えてくれるよつだ。

この家を訪れるのは実に半年ぶりで、どうして疎遠になっていたかというと、それはやはり初期の歌姫計画に安易に関わってしまったせいで、妙な罪悪感を抱いたからだった。もちろん叶は気にも留めていないし、むしろ喜んでくれた部分もあったのだが、俺だけが勝手に空回りをして悩んでいる。

物憂げに溜息を漏らして、視線をめぐらす。以前と内装に大した変わりはなく、最低限に必要なものだけが部屋を飾っていた。自由な身でもないから仕方のないことだが、叶はそれを苦に感じていならしい。公国での暮らしあほび自由ではなかつたらしく、慣れていののだという。

あえて違ひを挙げるのならば、光の具合だろつか。俺の錯覚だとは思うが、屋内にしては明るく温かく優しいような気が

「あつ？」

間抜けな声とともに、視線が一点に集中する。偶然に見つけた光の玉のようなもの。それは紛れもなく、精霊の姿だった。

慌ててキッキンの方に目をやると、トレイに紅茶のポットとティーカップを載せて、叶が歩み寄つてくるところだつた。俺の驚愕の表情と視線の先の精霊を見比べると、いたずらっ子のように叶は笑つてみせた。

『まだ、喋るとか歌うとかは、無理なんですけどね』

紅茶を淹れて一息ついたあと、叶は筆談で俺にそう伝えた。

『それでも、なんとか掠れた声は出るようになつてます』

内心の動搖を静めるように、震える指でカップに手を伸ばし、一口啜る。香り高い味が広がつて、何処か安心するようだつた。柔らかい微笑みを浮かべた叶は、ただ俺を見つめるばかりで、何も問おうとはしない。

「その、あれは？」

よく目を凝らせば、叶の家には数多の精霊が隠れていた。人の心の光なる部分を実態化したような存在。まともに精霊歌を奏でることも出来ない叶に、精霊たちは未だ付き従つている。

『不思議でしょ？ 鼻歌を唄つてみたら、集まつてきたんですよ。うーとか、んーとか。頑張つても、発音できるのはその程度ですけど』

あの日、俺は叶の全てを奪つてしまつたような、そんな感情を抱

いた。だが叶は、絶望なんてせず生きている。そして再び、歌姫としての自分を取り戻そうと足掻いている。もし報われない労苦だとしても、そのことがどうしてか嬉しく、勇気を分け与えてもらうように感じた。

「  
聴かせてくれよ」

『鼻歌を、ですか?』

一  
九

叶の歌声が聴きたくなつた。ひたすらに平和を祈つて唄い続けた歌姫の、失われたと思つていた歌声を、俺は聴きたかつた。

取てがしりてうすれは三へ副六なしに

レーベンハーゲンの「アーバン・リード」は、アーバン・リードの「アーバン・リード」。

『政治小説

彼ぢうな一威敵の業業にすうと立ち上がつて、汗が髪を整ふる。

卷之三

卷之三

それは確かに頼りない歌声ではあつたけれど、精靈が集まつてくるほどには素晴らしい尚更に心に響いた。

卷之三

鼻歌で数小節を唄いきつた叶は、久しぶりの披露に照れたようではにかみながら席に着いた。茶化されている感じないよう心を込めて俺は小さな拍手を送る。

た。

『私にも、  
聴かせてください。本当の歌を』

真摯な願いを訴えるように、じっと俺の瞳を見つめる叶。なんとなく落ち着かない気分になると、カップを手に取つて口元にまた運んだ。

「……本当の歌、か」

帝国の兵士だった俺と、公国の歌姫だった叶が、こうして王国にて団欒を図る姿には、不思議な感慨がある。女王が、昔そう言って喜んでいたことがあった。國の境なく精靈歌が人の心を動かすことの、何よりの証明だと。だが世間での扱いは、脱走兵と故人。二人とも、身分を偽つて留まっているだけの存在に過ぎない。

それでも確かに、俺は此処にいて歌姫と語り合っている。そして、平和の祈りを託されたのだ。それが唯一で、全てだった。

## 【1・3】ワタシ

昼食時を過ぎ、カフェテリア通りが落ち着いてきた頃。ようやく、俺は自宅へ戻った。煉瓦造りの小さな家だが、望と一人で住むぶんには特別不自由していないし、五年近くも経てば愛着は湧いてくるものだ。

いつものように玄関扉を開こうとしたところ、何やら話し声が漏れ聞こえたので来客かと思い、軽く身だしなみを整えてから足を踏み入れる。

「キュウリ……違う、ピーマン。それはメロン」

「は？」

まず望の脈絡ない単語の羅列に疑問を覚え、続いて目前に浮かんだ光景に啞然とさせられる。なんというか そう。シユールだつた。

オープンキッチンの端に置かれた、大型冷蔵庫。引きこもりの多い音楽家一人には、作業前の買い込みが欠かせず、食料の収納スペースとして新調したものなのだが、それはともかくとして。

「 ブロッコリー、アスパラガス……パセリなんて買ったつけ？ つて、あれ？」

その冷蔵庫の下段、いわゆる野菜室に上半身を埋めた見覚えのある少女。彼女の横で、次々に差し出される野菜の名前を挙げていく望。

手品か何かのように右手左手と交互に現れる緑一色の野菜には、妙な感銘を受けたりもするが、とりあえず短いブリーツスカートから伸びたモロな太ももが目の毒だ。

「おかえり、いつのまに帰つてたの？ あんたが遅いから、大変な

「！」

望の声にはつとなり、慌てて目を逸らすが、遅かった。少女の差し出した細長い野菜を引っ掴むと、望はダーツの要領で俺の目に全

力で投擲した。

「ぎゃああああつー！」

『氣をつけよう、田先のH口と、女の眼

望は説教をたっぷり三十分はしてから、キッチンへと入って作業を始めた。『そごそと手元で弄っているのは大量のネギ。届いてもいない生臭さを感じるのは、俺がネギ嫌いだからなのか……いや、単純に目に刺さったネギの匂いが染み付いているだけなのだが。濡れタオルで目を擦り続けている俺の隣には、調整を終えて到着したミクがちよこんと座っている。先ほどの奇怪な少女と同一人物だと思えないほど静かで、俯いて恥ずかしげに顔を赤くしている。時折感じる窺うような視線がくすぐついた。

「それで、ネギを探していたと？」

「そゆこと。ネギがエネルギー源の機械つて何よ！－ 正直まだ信じてないけど……試してみないと、仕方ない、でしょ！－？」

力を込めてネギをすり潰しながら、望がぶつぶつと独り言を呟く。ほんの少しストレスが溜まっているらしく、きっとミクの対応に手を焼いたのだろう。もう少し早く戻ればよかつたかと、俺は反省した。

「悪かったな。本当は、俺が家に居られたら良かつたんだが」「別に、いいわよ。それだけ、信頼して、くれてるってこと、でしょうしー？」

厭味のような本心のような、微妙な言葉。だが俺は都合よく解釈することにした。

「ああ。助かった、ありがと」

「……どういたしましてー！」

ほんの少し作業を止めて複雑な表情をした望だが、おざなりに返事をするとまた、ネギと格闘し始めた。相変わらず素直じゃないが、可愛い奴と思わないこともない。

黙つたままのミクと暫く待っていると、薄いエメラルドグリーン

の見るからに怪しげな液体をグラスに入れて、望が戻ってきた。

「えつと、ミクちゃん？ これで、いいのかな？」

躊躇いがちにネギジューースを差し出す望。受け取るミクも何故かおそるおそるだつた。

「あ、ハイ。大丈夫……だと思います」

「どうした、ミクちゃん？」

慣れない『ちゃん付け』をすると、望に笑われてしまった。俺自身きこちないとは思つたが、吹きだすこともないだろつじ。

「あははっ！ 似合わない！」

「う、うるせー！ それじゃ、あつと……」

「ワタシのことは、ミクと呼び捨てにシテください。マスター『ま、マスター！？』

ミクの申し出に驚いて、思わず望と顔を見合させた。そんな呼び名は一般的でないし、思いつく事例が少ない。

「マスターって言つと、あれか。酒場の

「違いまス」

容赦ないツッコミだ。機械にしてやられた俺つて、一体なんなんだ。うなだれる俺に代わつて、望が正解を口にする。疑いの眼差しを向けながら。

「主人つてこと？ 」いつが、ミクちゃんの？

「そうデス」

濁みなく簡潔に事実を述べるミク。こいつこつとは、人間の外見に相反して機械らしく感じられる。

「でも、ねえ？」

「これカラお世話になる身ですシ」

「そんな話、聞いてないけど？」

じりりと漆黒の瞳が俺を見射るが、睨まれても困る。俺も聞いてない。

「ワタシの所有者は、マスターという設定デスから」

正直、してやられたと思った。女王は初めから、経緯がどうであ

ろうと俺にミクを託すつもりだったのだ。協力者の一人ではなく、唯一の所有者として。

女王の願い、叶の願い。いまだ荷が重い気はしているが、不思議と意欲は湧いてきた。俺が新たな歌姫を送りだすのだと、決意できた。だから

「わかった。よろしくな、ミク」

「ハイ、マスター」

「まあ、それはいいとしてだ。飲まないのか、それ？」

『…………』

誰もが忘れ去っていた。例の翡翠色の液体は、いまだミクの手のなかにある。

「アノ、王宮の外で異物を口にシタことがないので。それでチョット警戒しているのだと思いますデス」

主觀なのか客觀なのかよく分からぬが、極めて冷静な判断をミクはする。これも機械ゆえなのだろうか。

「そういうことなら心配ないぞ？ 望はこうつ見えて、あくどい真似はしないからな」

「どう見えんのよ」

「まあ、あれだ。さつき望も言つていた通り。試してみないと仕方ない」

「ハイ、それでは、飲みマス」

無責任に言いながら、ミクがグラスを傾ける様は固唾を呑んで見つめる。

「あ、コレです。このゾロゾとした食感、喉に絡みつくような粘り気、鼻につく異臭」

『…………』

反応に困つて沈黙する一人。おそらく感想というよりは分析なのだろうが、どうしても不味そうにしか聞こえない。

「そのエネルギーの補給っていうのは、もしかして

「

「一日一回で大丈夫なのですガ……スママセン、」迷惑をお掛けシマス

ボーカロイドの世話なんてしたこともない。慣れるまでは大変そうだった、望が。

「それで？ ミクちゃんがここに居るっていうことは、話を受けてきたの？」

「いや、そういうわけじゃないが……まあ、やることは同じだ」

王宮の歌姫計画がこれから活動に支障あるかは不明だが、女王の心を信じてみるのも一興かと思う。疑いは消えなくとも、確かに歌への想いは見せてもらつたのだから。

「ミクを歌姫にする」

「はあ」

「気の抜けた返事だな。どうかしたか？」

堂々の宣言のつもりだったが、望は呆れたように溜め息をついた。「別に。そんなことは分かつてゐるよ。具体的にどうするかってことを聞きたいの…」

「考えてない」

「……馬鹿？」

容赦なく一刀両断されたが、認めざるを得ないかもしれない。生来、後先を考えて行動するのは苦手だ。さて、どうするか。

「ライブ　は無理か」

「こきなりは無理でしょ。まずはミクちゃんつていう歌姫候補を認知させないと」

物珍しそうに家中の探検をしているミクを傍目に見ながら、望は頬杖をついて考え込んでいる。その横顔を俺は何気なしに見つめていた。

「やけに乗り気だな」

「そう?」

「なんとくな」

いつも仕事に向かうときの真剣さとはまた違つて、楽しそうにも見える。期待感といえぱいいのだるうか。わくわくするよつた弾む空気を感じていた。

「あんたがやる気になつたなら、手伝つわよ。微力ながら、ね」「いや助かる」

「……ばーか」

視線は交わさず、相変わらずミクのほうに目を向けながら望と計画を練る。

「やつぱり最初は、ゲリラライブかしらね」

「そうだな」

「オリジナル曲は？ 何曲、歌えるの？」

「わからん……ミク、ちょっと来てくれ！」

呼びつけて質問してみると、ミクは困ったよつて答えた。

「えつと、いくつかマスターの曲は練習していますケド、まだ完璧ではナイです」

「タイトル教えてくれる？」

望に促されて挙げた曲は、どれも歌姫用に夢想しながら作ったもので難易度の高いものばかりだ。

「いきなりそれは……」

女王の本気は垣間見えるが、無謀ではある。「完璧に歌いきる」とが出来なければ、曲の存在価値がなくなつてしまふから。精靈歌とはそういうものだ。

「新曲を作つたほうがいいかもね」

「そうするか」

最終的に歌姫という境地に辿り着けばいい。焦ることは何もないのだ。俺達にはまだまだ時間がある。ゆっくりと着実に歩いていくう、三人で。

「はい、ますたー。すばりテーマは？」

「茶化すな……そだな。跳躍、とでも」

## 【2・1】 跳躍

昼食を摂るうと今朝から続けていた作業を中断してリビングへのドアを開く。そこにはミクが先客でいて、ネギジュー入のカップを両手に抱えて休憩していた。

「ミク」

「あ、マスター。お疲れ様デス！」

「調子はどうだ？」

「バツチリです！ 望さんがとても気遣つてクレルので」

体調管理や一般常識の学習など、ミクに関わることは全て望が請け負っている。曰く、女の子の世話を男がするなんてセクハラも甚だしい、といふことらしいが。なんだかんだ理由をつけながらも、俺の私用といえる仕事に付き合ってくれる望には、有り難さと申し訳なさの念が堪えない。

「それで望は？」

「お買い物に行ってクルといってマシタ。昼食は作るカラ、いんすたんとで済ませないヨウにと、伝言デス」

「そうか」

頷いて、ミクが座つているソファの隣に腰掛けた。

「望サンは、歌唱指導が上手デスね」

「あいつは歌も上手いからなあ」

「丁寧ニ教えてくださいって、ステキな人デス」

「素敵……ねえ」

酷い仕打ちの数々を思い出しつつ、望のことを考えていると当人が帰ってきた。噂をすれば何とやら、ということとか。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさいッ！」

ミクは嬉しそうに迎えに出ていった。レッスンを始めてから三週間ほど経つ。すっかり望に懐いてしまって、彼女のほうがミクのマ

スターらしい。

「休憩はもう済んだ？」一息ついたら再開するから。発声練習して待つてくれる?」

「ハイ、わかりマシタ！」

カツプの中に残った緑色の液体を一気に飲み干すと、余りある元気を撒き散らしながら練習室へと駆けていった。望はそれを温かい眼差しで見守っている。

「こうしてみると、姉妹みたいだな……」

「え?」

何気なく微笑ましい心持ちになつて口をついただけの言葉だったが、意外な反応をされて困つた。望の表情が見る見るうちに強張るのが分かる。

「いや、悪い意味じやないぞ? けしてお前のお子様体形がミクと同類だとか、そういうわけじや?」

「レッスン中、寝てていいわよ?」

毎度のことだが藪蛇なフォローをしてしまい、怖い顔をした望の鉄槌を食らう。空腹の胃で蹴りを受け止めるのは辛すぎた。

「つてえ……無闇に足を振り回すな! スカートの中が丸見え

「そもそも必殺技の名前でも付けたほうがいいかしら?」

「……失言が多いな。気をつける

「そーしてちょーだい」

お決まりの漫才にぐつたりしていると、部屋の扉を開け放しにしているのかミクの歌声が響いてきた。さつそく发声練習を始めたようだ。初等教育でやるような代物だが、いまのミクには一番効果がある。

『ドーレーミーファーソーラーシード』

「だいぶ癖がなくなってきたな」

「そうでしょ? 元々、歌つてるときは良かつたけど、最近は喋りでも機械訛りが薄れてきたと思うのよね」

まだまだ人間のように滑らかには発音できないが、それでもパツ

と聴いただけでは勘違いするかもしれない程に成長していた。それもミクの頑張りようは勿論だが、やはり望の歌唱指導が上手いのだろう。

「努力の賜物か」

「ミクちゃんは、ホント努力家だからねー。歌うのが好きなのか、歌うことしか知らないのか分からないけど」

心配のせいか愚弄のつもりか、揶揄するように望が言い捨てた。言い訳に聞こえるかもしれないが、二人ともミクへ注ぐ想いは本物だ。しかし、あくまでも機械に過ぎないということは事実として受け止めている。

「……そうだな」

「ま、それを教えるのは、あたしじゃなくて、あんたなんだろうし？」それが女王様の期待してる役割なんでしょう？ きっと

「わかつてるつもりだ」

買い物してきた食材を冷蔵庫に仕舞いこんでエプロンをつけると、望はキツチンに入った。昼食を作るのだろう。少し張つっていた気を緩めてソファに身を沈める、と望は小さく問いかけを残した。

「……ねえ？ なんで姉妹みたいだ、って思ったの？」

その真剣な色を帯びた声に、どうしてか俺は応えることが出来なかつた。

慎重に曲と詞の兼ね合ひを考え、珍しくぶつかつたりもしつつ、一曲目が完成したのはミクが家に来てから一ヶ月後のことだった。それからさらに一週間の練習期間を経て、ようやくお披露日の当日に至る。

「いよいよだな」

「そう、デスね……」

「緊張してるのか？」

「コレがそういう状態だというコトは知つていマス」

軽い調整を行つて、いまは出番まで控えている時間だ。リラック

スして過ごすのが一番いいのだが、俺もミクも割と硬くなっていた。それぞれ大小あれど、何かしらの責任が肩に乗つかかっている。それが無自覚であってもだ。

望は会場予定のカフェに出向いて、オーナーに話を通していることだろう。馴染みの顔だから問題はないと思うが、少しばかり戻るのが遅いような気もある。

「マスター。あの、ひとつ質問をしても、いいですか？」

「ああ」

「どうして、ワタシは歌うんでしょうカ？」

疑念と不安を抱えた声でミクは呟いた。人間同士であれば滑稽な会話だが、作った側と作られた側　人間とボーカロイドであれば、当たり前に噴き出す疑問だろう。

「一般的には、理由もなく歌いたいという衝動が起きるものだが、歌いたいか？」

「……ワカラナイ、デス」

「まあ、そういうだろうな」

歌姫としての可能性を模索するためだけに生まれたロボットなのだから、歌うという行為は単なるプログラムのひとつでしかないのだろう。専門的なことは分からないが、ロボットがそういうものである、という知識はある。ただボーカロイドが心を手に入れたとう発明が、果たしてどんな影響を与えたのかは不明だ。

「歌うのは好きじゃないか？」

「いいえ、歌うコトは好きです。カラダも、ココロも、温かくなりマス」

そう。女王の誇張でもなんでもなく、ミクには歌姫としての素質が確かにあった。それは歌つているときの僅かな発光現象。そして温かいという感覚。これは精霊が集まっている証拠だ。望が初めて見たときには驚いていた。

「それだけで十分だ。歌うのに理由は必要ないが、欲しければ『好きだから』でいい」

「…………」

「それにな、俺はミクの歌を聴くのが好きだぞ？ もちろん望もう思つてゐる」

「……本当デスか？」

「ああ、本當だ。俺達のために歌うのは嫌か？」

ミクは何かに縋るような上目遣いで俺をじつと見つめて、ふるふると首を振つた。

「マスター や望さんが、喜んでクレルなら歌いたい、デス」

「そうか。楽しみにしてる」

「ハイ！」

「遅いっ！」

開口一番に望は文句を吐き出した。多少いろいろした様子も見受けられるが今日に限つたことではなく、单なるカルシウム不足だろう。牛乳飲めば全て解決だ、色々と。行く末が容易に想像できるので、もちろん口にはしないが。俺にも学習能力はある。

「もうピーカ入っちゃつてるじゃないのよ。正午前に着けと言つたわよね？」

「…………」

「ゴメンナサイ……」

先ほどの感動というか、ミクとの語らいの甘さは一瞬で吹き飛んだ。現実スケジュール管理をしているのも望である。うつかり戻つてくるものと勘違いして遅れたのだが、頭が上がらない。

カフェテリア通りの一等地に建つカフェ『ミストレース』 女

主人という意味だが、オーナーは親父だ。改築はしているものの由緒ある建築物で、最初のオーナーが女王への敬意を払つたとか、妻を愛してやまなかつたとか、命名には幾つか所以ある話も残つている。そんなカフェの裏口に三人は集まつていた。

「様子はどうだ？」

「うーん。最高なんだか、最悪なんだか……スペース空けただけで

何か起ことると踏んだらしくて、だいぶ注目されてるわよ。オープンカフェのとこだから、立ち見もいるし。来るとき見てこなかつたの？」

「裏通りから来たからな。あまり目立つのも考え方のだし」「そう。まあ、密寄せは成功って感じ……プレッシャーは大きいでど」

眉を顰めて望はミクを見やつた。

「緊張してない？ 大丈夫？」

「大丈夫デスよ！ セーいつぱい歌いマス！ ちゃんと聴いてくれださいネ？」

「え？ あ、うん」

心配が全くの杞憂であつたかのように余裕あるミクに、望は圧され訝しがつた。

「……何かあつたの？」

「いや。ひとまず歌う理由を見つけたんだよ」

「なるほど」

端的な俺の言葉でも思ひ当たるところがあつたようだ。望も頬を緩めた。

この様子では今日のライブの成功は間違いない、そう思えることがなんだか嬉しくて、また歌姫としての未来がそう遠くないかもしれないと、初めて確信を持つた。

ランチタイムのピークを過ぎる頃。ミストレースの店内はいつもどおり落ち着きを見せはじめていたが、オープンカフェのほうは未だ混雑状態にあつた。

脇にセットされた簡易特設ステージには楽器が運び込まれていた。どこの馬の骨がゲリラライブをするのかと、多くの若者が好奇の視線を向けている。彼らは感受性が豊かで新しい刺激を受け入れ易いが、感じたままに率直な評価を下す。そもそもミクの歌がつまらなければ、すぐに離れていくだろ？ 逆に惹きつけることが出来れば、

大きな力になる。

「どうぞよろしくお願ひします」

裏で待機する俺と望は、二人の男性に向かつて殊勝に頭を下げた。オーナーの私設バンドのメンバーに、ギターとドラムの助つ人を頼んだのだ。ちなみにベースが俺で、キーボードが望。俺たちはプロほどの腕はないが、それなりに演奏ができる。聴けさえすれば、普通でいい。あくまでもメインはミクの歌声なのだから。

「行きましょう」

四人がステージに登場すると、野次馬の群れからどよめきが上がった。それぞれの知名度がそうさせるのかもしないし、併せて変則的なメンバー構成だからかもしれない。もちろん単純に、雰囲気を盛り上げる意味もあるのだが。

「あー、こんにちわ。俺、です」

マイクで軽い挨拶をすると、一瞬でどよめきが引いていった。わりと有名なメンバーが揃っていることで好奇は消え、等しく抱かれるのは期待だ。すると野次馬が観客へと成り代わる。

「えっと。表立った活動は久しぶりなんですが、今回は初プロデュースのお披露目にやつてきました」

緊張のせいか、普段とは違う斜に構えた口調になつてしまつ。横目に望の苦笑いが見えて恥ずかしくなつたが、心臓の鼓動は高鳴つていく一方だ。

「歌姫計画と銘打つて活動を盛んにしていきますので、応援よろしくお願いします」

言葉が切れると同時に歎声があがり、気分が高揚していくのが分かつた。最近は作曲の提供しかしていなかつたから、本当に久々の感覚だ。それは望も同じように感じている。そしていつかは

「それじゃあ、ボーカルの紹介……初音ミク！」

いつかは彼女も、歌う理由をこの空氣のなかに見つけることが出来るだろう。

ドラムのリズムからミクが歌いだす。そして前奏へ。

響いた歌声に観客がざわめいた。ボーカルが人間ではないと、前方の気づきが後方へ伝播していき、無数の囁きが騒音と化す。しかしステージ上のメンバーは誰も揺るがない。想定していた事態だ。口で説明しても仕方がない。音楽で納得させるのみ。

『ラララー、ラララ、ラーラー』

ララララー、ラララ、ララー ララーラー

軽快なドラムにギターとベースが乗り、キーボードが彩る。

ミクは一生懸命に、しかし笑顔で歌を唄っていた。純粋ゆえにつ一つの音と言葉の意味を自分なりに解釈して、また教えられて吸収し伝えようとする。この姿勢こそがまさに歌姫そのものだ。

『ラララララララ、ラララー、ラララ

ラララララララ、ラララー、ララ

一番のサビに入ったころには、観客の戸惑いは薄れかけていた。ミクの歌声が確かに説得力と感情をもつて響き渡り、心を動かす。俺の曲、望の詞、ミクの声。三人が同じように抱く決意が込められている。

『ララ、ラララ、ララララー、ラララ

ララ、ラララ、ララララー

一番のサビに入る前、わずかだが精霊が集まってきた。過去の伝説と化していたそれを目にした、観客が、メンバーが、息を呑む。

歌姫だ。誰かが言った。

拍手でリズムを取り始めた観客が見えた。

溢れる涙を止められないで、呆然と立ち尽くす女性がいる。

拍手の波が広がり、歓声と嗚咽と旋律と歌声が調和して、街を包み込む

間奏での転調、そこでやつと気づいた。俺も涙を流している。

『ラララララララ、ラララー、ラララ

ラララララララ、ラララー、ララ

最後のサビ。誰もが高く掲げた手でリズムを取り、耳を澄ませて

聴き入っている。失敗の可能性なんて考えるまでもなかつた。ミクは紛れもない、歌姫だ。

精靈の調べが強く訴えかけるのは、数多の歌姫が遺した平和への祈り。フィーネリアには滅びた公国からの移住者も多い。涙を流した人々は、おそらく思い出したのだろう。穏やかな日常と、それが失われたときの哀しみと、最後の歌姫が遺した精靈歌を。

一曲限りのゲリラライブが終わる。惜しみない拍手を送り続ける観客に、俺や望は感謝の意を込めて礼をする。ミクの表情は見えない。だがその背中は小さく震えていた。

「お疲れ様」

「ああ……望か」

「どうしたの？　ぼおっとしゃって」

「ちょっと、な」

満月の皓々と照らす夜更け。家の裏に広がる庭園へ望がやつてきた。曖昧に言葉を濁すと、俺が座っている岩の隣へ腰掛けてくる。

「ミクは、もう寝たのか？」

「うん。やっぱり緊張して疲れちゃつたみたいね」

「そうか……」

風が梢を打つ音に雜じつて、酒場の喧騒が遠くに聞こえる。しかし辺りは静謐としていて、時間がゆつたりと流れているようにも感じた。暫くのあいだ、二人は黙つて夜風に身を委ねた。

「今日のライブ、大成功だつたね」

「そう、だな」

歯切れの悪い返事に、さつそく怪訝な様子を見せる望。

「……何か不満などこでもあつた？」

「いや、そうじゃないんだが。順調すぎて怖いというか、そんな感じだ」

ライブ 자체は、これ以上ないほどの成功だったはずなのだが、もやもやとした心持ちが拭えないでいた。不安要素が無かつたといえ

ば嘘だが、大したことはないと高を括っていたかも知れない。

「なあ、望。ミクが歌つたのか、ミクに歌わせたのか……どっちだと思つ?」

「いきなりな質問ね。よく意図がわからんだけど、両方、じゃないの?」

曖昧な問いにも望は答えてくれた。おそらく深く考えてはいないのだろうが、その認識が現状を物語つているようにも思える。

「いまはまだ、歌わせる状態なんだよな、きっと。望も言つてただろ? 歌うのが好きなのか、歌うことしか知らないのか、判らないって」「

「確かにそう言つたけど……でも、そんな気にしなくていいんじゃない? 初ライブでミクは認められたわけだし、大丈夫よ」

表情に暗い影を落とす俺に向かって、軽く微笑みかけてくる。望の前向きな言動には、今まで何度も助けられてきた。だがそれでも、今回ばかりは嫌な予感がしていた。

「それよりも、次の曲なんだけどさ」「

明るい口調で企画案を話して聞かせる望。それは慎重な俺には考えも付かないものだつた。成功すれば一気に知名度は上がるかもしれない。だがリスクは大きい。

俺は、頭のどこかで失敗するかもしれないと思いつつも、結局任せることにした。この心配が杞憂であればいいと願いながら。

「私は人間じゃないから、か……」

いつかのミクが呟いた一言が、重大な意味をもつて迫るのを感じていた。

## 【2・1】 跳躍（後書き）

ライブでミクが歌つた曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになられましたら、是非お聞きください。

『after resolution』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1449758>  
YouTube  
<http://www.youtube.com/watch?v=HodE4IrZBVY>

## 【2・2】人間じゃないから

鮮烈なデビューの余韻も冷めないうちに、俺達は次の曲を発表した。ライブではなく、ディスク流通で。先行情報のない正体不明な新曲は、発売日こそ伸び悩んだものの徐々に売れ始め、いまでは爆発的なヒットを飛ばしている。その要因には望が目論んだとおりの支持層があった。

「やっぱり女の子の噂つて凄いわよねえ」

音楽番組をチェックしているところで、望が他人事のように話しかけてくる。もう深夜だ。欠伸まじりで、だいぶ眠そうだった。

「何をいまさら……口調が婆臭いぞ」

「なつ、失礼しちゃうわね、もう。現役バリバリの恋する乙女だつてえの」

「……無理すんな、変」

「むう……」

望自身も「女の子」たちよりは年増だと自覚しているらしい。いじけて機嫌が悪くなるかと思つたが、凹みながらも紙を差し出してきた。

「細かいことは、ミクに教えながら直すから。まだ発音で不安なところもあるし」

受け取つて目を通すと、ここ数日あいだに何度か眺めた歌詞の決定稿が丁寧な筆跡で綴られていた。多少の差異はあれ似通つたものだが、大事なことなのだろう。俺に作詞は解らないが、その点を軽んじたりはしない。

「ああ、お疲れ。レコードイングは一週間後で大丈夫か?」

「えつと、たぶん平気よ。あの子、覚えが早いし。それに唄うのが楽しくなってきたみたいね、最近よく笑うから」

「おやすみ、と望は自室に戻つていった。

デビューライブを成功させて次に望が提案したのは、若者をターゲ

ゲットにした恋愛モノの制作だった。ポップでキューートという作曲への要求には苦労したが、特に女子学生から評判が良く、噂が宣伝の代わりとなつて売り上げ枚数を増やしている。来月には一枚目の発表と野外ライブも決まっており、すべてが順調だった。

『ららららーら、らーらららー

てててて、ててててーーー』

ラジオからミクの歌声が流れてきて、三週連続の売り上げ一位を知らせた。放送塔の看板番組で、音楽を聴く人間は大抵このチャートをチェックしている。つまり大衆にとっての評価基準がここにあるということで、Dノの軽い口調に俺は懸念の一端を見て取った。

『いやあ、凄いすねえ！ この曲を歌つての「初音ミク」は一時期話題になつたボーカロイドということです、科学もとうとうココまで来たかつてカンジつすね！ ホント人間みたいですよね？ この機械の普及が始まれば、音楽の復興も間違いナシでしょう！？ 未来の歌姫に期待したいところですっ！！ それでわ、またつ！ シーコーアゲイン』

果たして良いのか悪いのか予想外なことに、音楽チャートは「初音ミク」が六週連続の一位を獲得し、七週目に新曲が成り代わる形で推移した。望は素直に喜んでいたが、ミクは実感がないようだつたし、俺は薄気味悪い感触さえ覚えていた。

この流行は異常だと、頭の何処かが警鐘を鳴らしている。だがやはり、俺は流れに身を任せた。何があろうと、歌姫計画の行く先を見届けなければならないと思つたから。

一枚目の発売後、ようやく一息ついた俺は王宮へと足を運んでいた。ライブでの発言について、一応の報告と説明をするためだ。

いつものように客間で待つていると、謁見の間ではなく執政室へ通された。理解しているつもりだが、やはり俺との会談は聞かれて困るものらしい。任せられた歌姫計画にリスクを負うのは女王だ。王宮内でも複雑な立場に置かれているだろうことが想像できる。

「失礼します」

「いらっしゃいませ。どうぞお掛けになつて?」

勧められるままに、家にあるものとは比べ物にならない高級そうなソファに腰掛ける。身体が深く沈んで、違和感と落ち着きのなさを感じた。

女王は暫らく書き物をしていたが、一区切りついたのかペンを置くと口を開いた。

「やつてくれましたね」

唐突な一言だったが、何のことを指しているか心当たりはある。まさか知られていたとは思わなかつたが。

「ああして宣言されてしまえば、そう簡単に歌姫計画で手出しはできないでしょうね」

女王は他人事のように笑うが、あれは王宮に対する布石だつた。全貌がわからない以上は、用心しておくに越したことはない。

「それにしても、凄い騒ぎですわね」

表情を緩めて多少の驚きを込めた口調で言ひつ。

「今回の件は、もう?」

「ええ、耳にしています」

「……申し訳ありません」

「なぜ謝るのですか? 全てお任せすると言つたはずです。それに、何か考えがあつてのことでしょう?」

歌姫計画を宣言したことは間違つていないと思つが、まさか王宮へ問い合わせが殺到するとは考えもよらなかつた。だが、前回の歌姫計画は王宮が自ら公表していたのだから、不思議なことでもないだろう。単に俺の思慮が浅かつたと認めざるを得ない。

「それは勿論ですが……実はですね」

かくかくしかじかと、ディスクの発売に至つた経緯と目的を説明する。加えて、微妙に食い違う望の期待と俺の懸念をも。

「そうだと思つていました。貴方は慎重ですから、このよつな冒険をするとは思えませんし。望さんの発案なら納得がいきますわ」

「女王は、どこのお嬢様にお考えですか？　俺にはこれで良かったのか判らなくて……」

迷いをさらけ出すと、優しく微笑んで女王は応えた。

「結構なことじゅないです。安全な道ばかり選んでいては、成長なんてしませんもの。確かに望さんの考えは甘いかもせんし、貴方の意見は尤もでしょう。けれど、失敗したからといって失うものがありますの？　傷つかなければ解らないこともありますわ。それが人の心というものでしょう？　痛みのない世界に、安らぎはありませんのよ。きっと」

数日後　俺たちは一度目のライブを迎えた。前回と同じく、ミストレースのオーナーにお願いして私設バンドのメンバーに助けてもらっている。

郊外の公園に建てられた野外ホールには大勢のファンが集まり熱狂的な空気が醸しだされていたが、何処か不穏な空気も肌を刺すようを感じられた。それは一部の冷めた視線であったり、巷で流れてる風聞だったりする。

『らーらーらーらーらーらーらー  
らーらーらーらーらーらーらーらー  
らーらーらーらー』

一曲目・二曲目と淡い恋を応援する歌が続く。俺のようなおつさんは真正面から受け取るには照れを感じるが、若者の多くは共感を寄せているようだつた。粗いすぎた感も否めないが、曲も詞も若者たちの嗜好にぴたりと嵌つていた。しかし、だからこそ

「俺さん、すげえよな。天才だよ、天才」

「可愛い歌だよねえ。やっぱ詞がいいよ」

誰もミクには触れない。ボーカロイドが上手く唄えるのは当然。そういう顔をして聴き入っている。あくまでも唄っているのは「ボーカロイド」であり、「初音ミク」という主体ではないのだ、彼らのなかでは。

静かな憤りと大きさを増す不安を腹に抱えながらも、ライブは表向き順調に三曲目を流していく。一番の人気を誇り、一番の批判を集めた歌。

『らーらー、らーらー、らーらーらー  
らーらー、らーらー、らーらーらー』

特徴的な前奏から軽快なメロへ、ミクの声を引き立てながら演奏が盛り上がる。若い世代を中心に客席からも合いの手が入り、一体感を持つて曲は進んでいく。

『ンーン、ラーラーラー、ラーラー、ラーラー  
ラーラーラララーラ、ラーラーララ、ララーラーラ』

それでもやはり、導火線に火の点けられた爆弾は爆発するしかない。

一番が終わり間奏に入るとき、視界の端に飛来する何かが映った。それは軽い音を立てて、ミクの頭にぶつかる。投げ入れられたのは空のペットボトルだった。

ミクの「Hッ?」といつ小さな驚きを、ヘッドマイクが拾つて会場に届ける。

突然の出来事に、しんと静まり返つた客席が今度は大きくざわめき始めた。野太い罵声がブーイングとなつて膨れ上がり、野外ホールに地鳴りを起こす。スタッフの注意も全く意味を為さず、ついには観客同士で衝突が起きた。

暴力に訴えて混乱を起こそうとする者。焚きつけるように野次を飛ばす者。関わり合いにならないよう遠巻きに見ている者。感化されて罵詈雑言で反論をする者。彼らのなかに音楽は存在していなかつた。

ステージ上はといつと。助つ人の一人はさすがで、戸惑いはあるだろうが安定した演奏を続けている。しかし、望のキーボードは調子を崩して音を外しはじめた。盗み見たその横顔は青褪めて、動搖をあらわしている。

長い間奏が明けても、とうとうミクは唄いだすことがなかつた。

ただ無表情に、騒動の一点をじつと見つめている。この対比に人間と機械の本質を垣間見たような気がして、俺は心の奥で空しさを覚えた。

最後の最後で台無しになってしまった野外ライブから数週間。特に何をするでもなく、俺達は日々を過ごしていた。

相当のショックを受けたのか、望は部屋に引きこもって出てこない。レッスンはミクが自主的に練習しているだけだ。釣られるように俺も手慰みで曲の制作をしているが、いまひとつ気は乗つていなかつた。

そして必ずやつてくる朝。いまでは、望のかわりにミクが俺を起している。

「マスター。起きてください、マスター」  
「んうー？ 何時、かなあ？」  
「もうお昼ですよ」  
「丁寧の助動詞わあ、一重に使わないでおこうねえ」  
「……寝起きのマスターは、キモイです」  
どこで覚えたのか辛辣な言葉を吐き捨てられる。望のかかと落としが襲つてこないのは助かるが、ミクの言葉責めも如何なものか。  
「ちゃんと寝たほうがいいぞお？」隕が出るから  
「熊なんて出ません」  
「……そり、だにやあ」

いや。ボーカロイドの初音ミクが言う台詞としては尤もなんだが、何か壮絶な擦れ違いといつか、二コアンスの違いのようなものを感じるのは、気のせいなのだろうか。

「もう少し寝よ。ちゃんと寝たほうがいいんだ」  
最近の眠りが浅いせいでの疲れで、安らかに目を開じる。

すると傍らの気配は、諦めの溜息とともに足音を遠ざけていった。大人しいミクは強引に寝込めば放置してくれると踏んでのことだ。

しかし

とてとつ。ぶんつ！ ばしつ！

「いできつー？」

駆け寄る気配と風を切る音。頬を打つ地味な痛み。恐る恐る目を開くと、怒ったような表情のミクと視線が合った。その手にはなぜに野菜？ 疑問符はさておき、無意識にツツコミを入れる俺。やはり寝ぼけていた。

「ネギを振るなつ！」

「心持ち、頬が痛いんだが……」

「気のせいですますよ？」

「丁寧の助動詞は二重に使うな」

なんだこのデジヤヴ。ご機嫌斜めのミクは、ふいと顔を背けるとマグカップの中身を大げさに啜つた。また寝起きに向かやらかしたのだろうか。

苦労して覚醒を果たすと、俺は一人分の昼食を作った。普段は面倒でインスタントにしがちだが、一応自炊もできる。ネギジユースはミクが見様見真似で頑張っているが、望が作ってくれるものと違うと嘆いていた。どんな差があるのかは知らない。

ともかく、隣の部屋に望は居るのだが、実質ミクとの奇妙な共同生活が営まれていた。適度な時間にミクが俺を起こしに来てひと悶着起こり、食事を摂つてご機嫌を取り、あとは夜までそれの作業をしている。夕食が済んだらミクの勉強時間になり、俺が教師役で一般知識や音楽を教える。

望がないおかげでと言つと齷々たりだが、俺とミクは以前よりも距離を縮められたように思う。望と交わすような他愛無い会話も出来るようになった。しかしだからこそ、物足りなさを感じる。三人一緒にという想いが強かつたのだ。そしてそれは、ミクも同じだつたのだろう。

「望さん、どうしたですか？ わたしのせい、デスカ？」

「いきなり何だ。ミクは悪くないぞ」「でも、やっぱり。ワタシは人間じゃないから、歌を唄うのは才力シイから」

「誰も悪くないんだよ」

そう、誰も悪くない。世界にとつてミクの存在は受け容れがたいものだから、今までよりも少しだけハードルが高い。それだけなのだ。

大勢の人的心を一つにする、なんて絵空事にしか聞こえないが、歴代の歌姫たちはそれをやってのけている。もちろん少なからず障害があつたことだろう。人間じゃないから、機械だから。そんなことは些細な問題でしかない。俺達が目指している場所は、そういう頂なのだ。

「マスター。これを望さん」「……」

「ん？」

手渡されたのは一枚の紙。無機質な文字が規則的に並んでいる。しかし拙い言葉を組み合わせて、自分なりの想いを形にしようとしているのが分かつた。

「この詞は、ミクが書いたのか？」

「ハイ。わたしは人間じゃないけど、ココロがあります。機械だけど感じられるし、考えることができます。望さんが悲しいのは嫌です。唄うことしか出来ないから、歌で元気にしたいです。わたしに……わたしに唄わせてください、マスター！……」

それは強烈な意志だった。誰に強制されるでもない、誰かへと想いを伝えるための歌。これでいい。純粹な想いこそが歌姫にとって唯一の、そして最大の資質だから。

「望。ちょっとといいか、入るぞ」

一応ノックをするが、応えないのは分かつている。俺は躊躇いがちに扉を開いて、部屋の中を窺つた。真昼だというのにカーテンを閉め切つて電気も点けず、ふて寝するかのようにベッドでうずくま

る望。だが実のところ、全く眠れていることを知っている。

窓際に寄つてカーテンと窓を開け放つと、新鮮な空気と光が部屋に入り込んできた。そしてようやく、望が俺のほうを向く。久しづりに見た表情は、疲労感でいっぱいだった。

「お田覓めかな、お姫様。気分はどうだ？」

「……馬鹿？」

「いきなり失礼なこと言つたな。昼飯もつてきてやつたんだぞ」

「いつもみたいに置いとけば、そのうち食べるわよ」

望は言い捨てて、顔を背けるように寝返りをうつた。

「残してあるくせに」

「……うつさい」

罵倒にも力がない。参つているのがはつきりと分かつてしまつだけに痛々しく思う。

昼食を載せたトレイを作業机に置いて、俺は椅子に腰掛けた。

「お前がここまで落ち込むのは珍しいからな。多少、心配してやらないでもないが。そろそろ引き籠もあるのも飽きないか？」

黙りこんで応えてくれない望の様子に、俺は大げさな溜息をつく。「そろそろ次の曲も作りたいぞー」

「……どうして？」

「うん？」

次回作の理由を聞かれたのかと思つたが、そうではなかつた。のそりと身を起こして、望は俯きながら疲れた口調で喋る。

「なんで責めないの？」

「責めるわけないだろ」

当然のように言つてやる。望はライブの失敗を自分の責任だと考えているみたいだが、とんでもない。確かにリスクの高い提案はしたが、それを許可したのはプロデュースをした俺自身だ。もし責任の在り処が必要なら、俺が負うべきこと。

それに今回の騒動は、起きるべくして起きたことなのかもしけないから。正直、仕方がないだろうと思っていた。

「あんたが心配してたとおりだつたじゃない……あたしだつて機械  
としか、道具としか、見てなかつたかもしない。だから  
『やめろよ。お前は、ちゃんとミクと向き合つて』

「…………」

「どう慰めたらいいのか、どうすれば立ち直るのかなんて分からな  
い俺は、最終兵器としてミクから託された紙を望に渡した。

「ほれ

「なに、これ」

「ミクが書いたんだよ。望に渡してくれって

「……あたしがいなくとも平氣つてこと?」

興味なさげに田をやって、自嘲氣味に咳く。

「なに言つてんだか。ちゃんと見てみろよ、こんな拙い歌詞なんだ  
ぞ?『私には歌う!』としか出来ません。だけど、貴女がいないと  
歌うことが出来ないんです』っていつメッセージじゃないのか?」

「…………」

「俺が曲を作る。ミクが歌を唄つ。お前が詞を書く。三人とも、最  
高の才能の持ち主だ。贅沢なグループだろ?」

「……自意識過剰」

言葉は辛辣だったが、それはいつものことだ。望は僅かに苦笑を  
漏らしていた。

「早く立ち直れよ。お前がいないと、困るんだよ」

結局のところ、望が自分で立ち直らないと意味がないことに気が  
ついて、俺はお節介を焼くだけにとどめた。俺自身の言葉は何も伝  
えていない。ミクの気持ちを渡しただけだ。それでも、むしろ少し支  
えてやりたいと思つ。

望の部屋をあとにしてリビングに戻ると、ミクが心配そうに俺を見上げた。子供にやるよつに頭を撫でて、唄つ。

「ミク。さつきの歌詞、覚えてるか?」

「エッ? あ、ハイつー!」

背中にミクの返事を聞いて、立てかけてあつたアコースティックギターを手に取る。俺たちは不器用だから、やはり音楽で語るのが一番だろ。」

「こまから適当に弾くから、合わせて歌つてみてくれないか？」

「わかりましたっ」

本当に適当に、それっぽいコードを繋いでいく。

『らーらー、らーらー、らーらー、らーらー』

慣れないアドリブでも一生懸命に心えようとするミクは、 McConnell でなく健氣で可愛らしく映つた。この姿を見れば、これもいい経験だったかもしれないと思える。たつたひとりに云ふとすると姿勢は、これから成長に必ずプラスとなるはずだ。

『らーらーらーらーらー、らーらー、らー』

ミクの想いは、ちゃんと望に伝わつただろ。真摯な歌声が届くことを願いながら、俺は演奏を続けた。

## 【2・2】人間じゃないから（後書き）

ラジオ内で流れたものとライブで歌った二つのイメージ曲は『ひらり』です。

もし興味をお持ちになられましたら、是非お聞きください。

『晴れときどきにわか雨』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1568046>

YouTube

<http://jp.youtube.com/watch?v=CXFK8R1bjac>

『SING & SMILE』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1697854>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=IY7gusGBTQQ>

『メルト』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1715919>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=m4jkxxyCBygs>

## 【2・3】 機械だけど

翌朝、俺を起こしにやつてきたのは相変わらずミクだったが、リビングに入るとホットミルクを啜りながら作業に没頭する、よれよれの望の姿があった。

「の、望？」

「なによ……眠いし疲れてるしで限界なんだかい、何も突っ込まないわよ」

「いや、それはいいんだがな」

復活してくれたということに、自然と笑みが浮かぶ。俺は望の対面に座つて、ミクが持つてきてくれたブラックのコーヒーを一啜りした。

「…………」

「…………ほい」

テーブルの端に纏めた数枚の紙を手にとつて、望が差し出してきた。俺はそれを受け取ると、さつと田を通す。

「これは…………？」

「わかんないの？ 次のライブ用の曲、みつつ。一番上のが、ミクが書いてくれたのを弄つたやつ」

「マジでか。一晩で？」

「ん、徹夜で」

転んでもただでは起きない女。未恐ろしいな……望らしいつちや、らしいが。三曲それぞれ独特な詞だが、飛びぬけて異様なのがあつた。これは

「これは…………歌えるのか？」

大量の漢字とルビの羅列、にしか見えない。意味がわからない単語もちらほら。それに指定されたBPMと歌唱領域。この速度で高音を伸ばすのはキツイだろ？

「大丈夫よ、ミクなら歌える…………ねつ、ミク？」

「エッ？ あ、ハイっ！」

ミクは、久しぶりに望が作ったというネギジュースを、幸せそうに飲んでいた。勢いで返事をしたように聞こえたが、本当に大丈夫だろうか。

「あたしね、やられっぱなしは嫌なの。きちんとリベンジするわよー、がつんと言わしてやるんだから！」

盛大に凹んで何週間も引き籠もっていたはずの望は、瞳に闘志をメラメラ燃やしていたという。

望の指揮のもと、怒涛の勢いで曲の制作は進んでいった。望の頭のなかには完成形があるらしく、アカペラで歌つて貰つたり、お互に罵詈雑言のような話し合いをしながら、着実に曲を磨いていった。

メロディをつけるだけなら簡単だ。そんなことは誰にだって出来る。難しいのは、それを形にすること。そして、歌詞の世界観とのすり合わせ。なるべく多くの人々がイメージを共有できるような、そんな音作り。

音楽の良し悪しはプロかアマかで決まるのではない。俺たちのようなプロに求められるのは、何かに特化するにせよ、幅の広さを持つにせよ、純粹な完成度だ。期待に応えるということだけ。

だが、作品を送り出したいわけではない。いまの俺たちが贈るべきものは

『どう？ おっけー？』

レコードティングルームにて。三曲をノンストップで歌い終えたミクに駆け寄つて、その頭を撫でながら、望は誇らしげな視線をブースにいる俺に向かた。

『ああ……完璧だ。これでいい』

OKサインを出す。久しぶりの高揚だ。

今回は、ディスクの流通に先駆けてライブを行つ。望の希望どおり、がつんと言わせるためだ。女王に掛け合つて、電波塔とも話を

つけた。生中継でのスタジオライブになる。失敗すれば後がないが、この出来なら、きっと大丈夫だ。

「なあに、小難しい顔してるのよ」

レコードティングした素材を吟味しながら物思いに耽っていた俺の隣に、望が腰掛ける。

「いや、なんでもない」

「なんでもないってことないでしょ……まだ、心配事もあるの?」ほんの少し真剣味を帯びた声で、望が俺の様子を窺う。初ライブの日の夜が、この状況に似ていたかもしない。あのときは、ミクの未来を楽観視していた。しかしながら今は不安げで、表情にも影を落としている。

「心配事というか。曲の良し悪しは俺たちが決めるもんじゃないからな。どう評価されるのか、って考えてたところだ」

「……そつか。そう、だよね」

「まあ、気にして仕方ないけどな」

ふつと笑い飛ばした俺に対して、望は無言で俯いた。前回のライブをまだ引きずっているのだろうか。あの事件は曲 자체が悪かったわけではない。望の戦略は妥当だつたし、現にある面では成功しているのだ。しいて言うなら時の運、だろ?。

オーディエンスも結局のところ人間だ。この世の中で正当に評価されている作品なんて皆無に違いない。世間の風潮や個々の好みや他楽曲との比較で、相対評価されてしまう。だからもしかしたら、ミクもここで終わってしまうかもしれない。けれどそれもある意味で当然の淘汰だと言える。だから本当に、考えても仕方ないのだ。

「お前は笑っているよ」

「えつ?」

機材を弄りながら、声だけを望に向ける。

「らしくないぞ。考えるより先に手が出るタイプのくせに」

「大きなお世話よつ!」

後頭部を平手で叩かれた。

「いってえ……あのなあ」

振り向こうとして、両肩にかかつた柔らかな重みに動きを制された。身を固くした俺に対し、望は耳元で囁きを残して離れる。

「……ありがと」

俺が振り返ると、望は悪戯っぽく照れくさうに笑った。

「おはよづ、ミク」

「ま、マスター！？ び、びび、どうしたんデスか！？」

ミクが機械らしくもなく、大げさな驚きを見せた。俺が一人で起きるのは、そんなに不思議だろうか。リビングの壁時計を見やると、短針と長針が真っ直ぐ伸びていた。つまりこり、午前六時。ああ、なるほど。よく起きたな、俺。

「なんか目が醒めた。何気に緊張してるのかもな」

「キンチョー、ですか……」

「ああ。ミクは？」

いつものよづに田代めの一杯を淹れてくれるミクに礼を言つて、聞いてみた。

「わたしは、そんなにキンチョーはしていないです。初めてのときは、ワクワクする感じがあつたからですけど、今日はそうじやないから

「そうか」

「ハイ」

まだ望は起きてこないが、時間的にはそろそろだろうか。俺とミクはソファに並んで座り、ぼおっと朝陽が昇る様を眺めていた。小鳥のさえずりを聴くのも何時ぶりか。たまには早起きも悪くないと思つ。

「ミクにとつて今日のライブは何だ？」

「……リベンジ、でしうつカ。わたしは望さんの期待に応えたい。望さんの書いてくれる詞が、わたしの伝えたい」とデス。わたしの口から溢れた感情を言葉にしてくれるのは、望さんだけデス」

熱情のこめられた言葉から、ミクの望に対する絶対の信頼が見て取れた。だが危うさのようなものも感じ取れる。あのライブ以降、彼女にとって観客は敵なのだろうか。

「ミクは人間が好きか?」

「マスター?」

「感情があるのは……心があるのは、良いことばかりじゃない。誰もが愚かしさや醜さを曝け出してしまつ。黒い部分を閉じ込めてはおけない。もちろん俺や望も……あのライブの舞台上で、何を感じた?」

俺の問いにミクは難しい顔をして、アーカイブの底から記憶を引張り出してくるようにして、ゆっくり答えた。

「よくわかりませんです。色んな感情が渦巻いて、でもそれを認識できなくて。ただ……アア、コレガーニングントイウイキモノナノ力……つて。光に包まれた精霊さんが、わたしの方を見て、泣いていました。わたしは、ココロが痛くなりました」

まるで人のように、ミクは左胸に手を当てて苦しそうに表情を歪めた。

「人間が好きか、という問題には上手に答えられないです。だけど、望さんのことは好きです。女王さまも好きです。オーナーも好きです。マスターのことも……好き、です」

顔を上げて、どこか必死に熱っぽい視線を向けてくるミク。俺は宥めるように青緑色の髪を撫でてやつた。

「嫌われてなくてよかつたよ」

二人のあいだを若干の気まずさが満たそうかといふところで、望の部屋から目覚ましのけたたましい音が鳴り響いた。俺は空のカップを手にとつて立ち上がる。

「ミクは……人間になりたい、とか思うか?」

「……え。わたしは機械ですから」

電波塔管轄の某スタジオ。特設されたステージの上で、ミクは出

番を待っていた。今回は『ミストレース』のオーナー率いるバンドに演奏を依頼し、俺と望は観客席の後ろから傍観している。店は臨時休業らしい。

放送開始までの時間は僅か。音響やら照明やらの最終チェックに余念がなく慌ただしいスタッフに対し、ミクとバンドメンバーは落ち着いた雰囲気でスタンバイしている。いまひとつ落ち着きがないのは

「　　おい。なんでお前が緊張してんだよ。不遜な態度はどうにいつたんだ？」

「うつ……だつてもあ…」

いつものように強気に出る」ともできず、恨みがましい田で望は俺を睨んだ。開場のときからこの調子で呆れているのだが、そんな望の気持ちも少しばかりはないでもない。

すぐ前の観客席の空気が異様なのだ。用意された二三百席の観覧券は予想を上回る競争率だったといつし、あの事件以降も色々な意味で動向の注目された歌姫計画だから、仕方がないといえばそのなかもしれないが、好奇心と興味本位の縦い交ぜになった声があちらこちらから聞こえてくる。

「なんか……品定めされるみたいで、気分悪いかも……」

「まあ、確かになあ……」

一人してげんなりと溜息を吐き出した。

しばらくすると、一分前のアナウンスとともに照明が絞られた。ゆっくりとざわめきが引き、張りつめた空間が創り出される。

ステージ中央に佇むミクは俯いて、望は息を呑んで、その瞬間を待っていた。五秒前のカウントでミクが顔を上げる。不思議とぴたりと出会った視線に、俺が頷いてみせると、ミクもこくりと小さく頷きを返した。

用意した三曲ともが、今までリリースしてきた曲とは全く違う路線。リベンジに必要なのは純粋なインパクト。そして歌姫として

の圧倒的な実力を見せつけること。

人間らしくないから何だというのだ。当たり前だ、ミクは機械なんだから。そう開き直るのが、俺たちとミク自身の結論だった。キーボードから発現する重低音を合図に、演奏が始まる。歌いだしたミク。観客に歌詞の意味なんて伝わっていないだろう。文字面で見た俺ですら理解できていないだから、耳だけで理解するのは難しい。だが、望はそれでいいと言った。むしろドレミでもいいのだと。この曲は声という力を見せ付けるためのものだから。

序盤で一時広がったざわめきを搔き消し、観客を自分の世界に引きずり込むミク。重々しい威厳の前に立つ彼女を、誰もが驚嘆の声すらも失って魅入っていた。

口で沸き立つ鳥肌。  
この曲の最高音をとてつもない安定感で  
伸ばしきる。

さらに大サビで転調。最も苦労した曲を最初に持ってきたが、よく歌い切った。

一曲目は望の衝動で書かれた作品。今度は歌詞がメイン。普段は歌詞に注文をつけない俺が、望と散々討論して構築されたメッセージージ。何をどう伝えるか。いつのまにかミクは表現力を身につけようとしていた。

人工の喉から声を絞りだすミクの姿。掠れたように聞こえるのは音が出ないわけではない。込められた感情が、そうさせている。

一番のサビ直後、ミクの目から失われる光。歌唱指導の中でも特に異様だったパートだ。どこまでも機械的に、それこそ恐怖を覚えるほどに、自己と他者にただ純粋な疑問をぶつける。何のために?

そして三曲目。ミクが作詞した草稿を基に、話し合いながら何度も書きなおしたという詞。前の一曲で与えた衝撃を和らげつつ、民族調の儂いメロディで包みこむ。

これは空っぽになつた心に届ける、機械仕掛けの詩。確かに想いがそこにはあつた。

『ラララー、ラララー、ララ、ラーラーラ  
ラララーラ、ラーラーラ、ラーラーラ』

ミクが最後のサビを歌い終え、静かに流れる後奏のオルゴール。誰も声を上げることが出来ず、ただ聴き入つて、魅了されていた。

歌姫の旋律と、精霊の輝きに

## 【2・3】 機械だけど（後書き）

ライブでミクが歌った曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになられましたら、是非お聞きください。

『龍ノ啼ク箱庭廻り』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1804377>

『永久に続く五線譜』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1647289>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=p1awPCT0SXc>

『機械仕掛けの詩』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1830240>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=IWG1LtjUUBSM>

### 【3・1】賞の意義

トントン。

「はいはーい」

春の陽が空高くから差し込む真昼時。木製の玄関扉がノックされて、望が応対に出た。

フィーネリア王国全土に流された生放送のスタジオライブが去年の秋口のこと。あれから制作環境は相変わらず、外界の評価だけが盛り上がって、立て続けにディスクのリリースをしてくる。気がつけば半年が過ぎていた。

歌姫候補としてのミクの名声は、もつ十分すぎるほどに高まっている。さすがに先代の歌姫である叶には及ばないだろうが、実力はますます。精靈歌を唄いこなせるレベルにはあるはずだ。だが何かが足りない。初めてミクの歌声を聴いた日、望や叶が願った「本当の歌」を唄うには、まだ何かが

「もしもおし、起きてるー？」

ペチペチと頬を叩かれて、はつと物思いから返る。

「あ、もう行つたか。誰だつたんだ？」

「んー、これ。芸術協会からの郵便だけど、なんだろ?」

差し出された茶封筒を受け取つて、さつそく封を切る。中に入っていたのは一枚の書状と数枚の書類だった。金字の飾りを施された高価な生地の書状には、簡潔な文言が記されている。

「……芸、術、賞？」

「え、嘘つ。おめでとう！」

呆然とした俺の呟きに対して、望は驚きのあと祝福の言葉をかけた。望が素直なのは、芸術賞がそれほどに名誉な賞だからだ。

国立の芸術協会が毎年四月に選考を行い授与するのが芸術賞だが、前年度における作品で歴史に残るであろうと全会一致の採択がされたものだけが対象になる。このため「該当なし」という年度も少な

くなく、過去十年間で一度しか芸術賞は授<sup>レ</sup>されていなかった。そしていすれも建築分野からの受賞だった。

フィーネリアにおいて、音楽分野での受賞は過去を遡つてもおそらく初なのではないだろうか。さらに言つなら、受賞者が人間でないといふ点も。

「えつ……初音、ミク?」

「ああ」

「そんな　なんでも！？」

「いや、なんでつてな。まあ当然といえば、当然だろ。一瞬、夢見たけどな」

書状を見た瞬間の驚きは本物だつたが、これといって賞自体に興味があるわけでもないし、特にがっかりしたということもので笑い混じりに言つたのだが、望にとつては重大な問題らしい。

「だつて、ミクは機械なんだよ？　何が出来るつて、歌うだけじゃない！　あんたが曲を書かなきや、こんなに有名になるはずもなかつたのに……そうよ、芸術協会も物珍しさで選んだのかも。もしかしたら、女王様が圧力をかけたとか。ねえ、そうじやなきや可笑しいでしょ？」

「望、落ち着け」

「　っ！」

興奮していたところを齧められて、キッと俺を睨みつける。そんな自分に驚いたのか我に返つて視線を逸らしながら、それでも望は悔しそうに唇を噛み締めていた。

「……」めぐ。少し、頭冷やしてくるね

望が家に戻つたのは、夕刻になつてからだつた。出て行つたときよりは幾分かすつきりした顔をしていたが、俺が「おかえり」と声をかけてやると、氣まずさ半分、恥ずかしさ半分で「ただいま」と笑つた。

「さつきは、ほんとに『めんね』あたし嫉妬した。うん、たぶんそ

う

ソファに寝転がつて言葉を零す望を、俺は黙つて見つめていた。  
「あたしたち、ずっと一人で音楽やつてきたわけじゃない？ まあ  
ベテランの人たちに言わせれば、まだまだひよっこなのかもしけな  
いけど、何も言い返せないけどさ。でもね、いつもは謙遜してるく  
せに、自信あつたし。誰にも負けない詞を書いてるって。誰より良  
い曲をつけてもらつってるって」

ずっと 実際には出逢つてから六年しか経つていらないわけだが、  
不思議なほど音楽と望のいる日常に馴染んでしまつて、それまでの  
日々こそ夢のような気がしてしまつ。

「なんか、なんだろ。ぽつと出つて言つちやうとアレだけじや、割  
り込んできたミクに、横から掠め取られたよつな、そんな風に思つ  
ちゃつて……最低だね、あたし」

「馬鹿。それが普通だろ」

「馬鹿つてなによ、バカ」

評価されたい。認めてほしい。気に入つて貰いたい。誉めてほし  
い。そういう気持ちは人間が潜在的に抱く当たり前の感情だ。貰と  
いうのは、その渴望を叶えたひとつのか形であるかもしれない。

身も蓋もないが現実として、何か特別に努力ができるわけでもな  
い、才能がものをいう芸術においては、特に表出しやすい。いつも  
簡単に自分の限界が見えてしまう。しかしミクは限界を容易く超え  
てしまう存在だ。そう、人間じゃないから、機械だから。本来なら  
同じ士俵で比べること自体が間違つているのだ。

誰も望の言い分を責めることは出来やしない。だが望自身は責め  
る。ミクに心があることを知つてているから。それが確かなものだと、  
知つてしまつてしているから。

「まあ、なんだ。音楽やって一年のミクに負けるなんて、俺た  
ちもまだまだだつことだな。これからもずっと一緒にやつてくれ  
だらうし、頑張ろうぜ相棒」

「よくもまあ、そんな簡単にな……」

根本的なところに關しては誤魔化し半分の励ましたのだが、それを指摘されると、何故か呆れたような溜息をついて苦笑されてしまった。

「なんか可笑しなこと言つたか？」

「いーえ、なんにもー。はいはい、頑張りましょうね。これからも、ずっと」

すっかり元の調子を取り戻したらしく、望は、ふざけた口調で言って、けれどその表情は明るかつた。

望が感情的になつて言つてしまつた根も葉もないこと。芸術協会に圧力は通用しない。芸術の都として名を馳せるフィーネリアにおいて、聰明な芸術家たちを前に納得のいかない選出が出来ようもないからだ。だが、女王が直々に声を発したならどうなるのだろうか。疑いたくはないが、「初音ミク」が芸術賞を獲るにはまだ早い気がした。芸術賞の芸の文字すら、俺の頭には浮かんでいなかつたのだから。ミクに対する　いや、歌姫に対する女王の思い入れは強い。可能性としては十分ありえると、そう思えててしまう。

小市民の身でありながら、王宮を訪れるのは何度目のことだろう。畏れ多い気持ちは多分にあるが、何かにつけ入城しているので習慣づいてきた感覚もある。

さらに近頃では暗黙の了解になりつつあるが、正規の手順をシヨートカットして執政室へと通されるのも、特別な処置であると自覚していた。時折それ違う大臣らの刺すような視線から、それが女王の独断であることが窺える。

「ご無沙汰しています」

「いらっしゃいませ。どうぞお掛けくださいな」

軽い挨拶を交わして勧められるままにソファでくつろぐと、女王は執務の手を止めて俺と向き合つた。

「まずは折角お越し頂きましたので、直接お祝い申し上げますわ。

芸術協会における各賞の選考が終了し、昨年度の受賞について内部公開がありましたので、本日付で該当者に通知を致しました。あの子が芸術賞に選出されたということでおめでとうございます」

「はい、ありがとうございます」

ミクのマスターとして、俺は恭しく頭を下げた。生みの親である女王の口上としては白々しくもあるが、その口振りに嫌味は感じられない。それはミクを育てあげた俺や望に対しても敬意を払っているからだと、自惚れではなく理解している。

「正式な授賞式については通知の書類にあるとおりですが、授賞パーティーの詳細に関しては後日の顔合わせにて『報告いたしますので、どうぞよろしくお願ひ致します』

しかし理解しているからこそ、望の嫉妬とは違う側面から疑ってしまう。俺も女王も子供ではない。お互いの真意が別のところにあると知りながら、約束を交わし絆を結ぶ。当たり前のようだに、駆け引きをして利用しようとする。だが気分的には、裏切られたという想いに近いものがあるのも事実なのだ。

「言葉ひとつで、俺は女王を盲目的に信じていたのかもしれない。受賞者および関係者各位との会談や茶話会も予定しておりますが

」

俺が抱えていた迷いを断つて視線を強くすると、それが伝わったのか女王は言葉を切つて表情を崩した。受賞の祝福は本物だが、授賞式やらの説明は本題の前振りでしかない。

女王と俺たちの関係は、例えるなら実母と養父母のそれだろうか。どこか的違いのような気もするが。ともかくミクを挟んで譲れないものがあるのは同じだ。どちらの意見が優先されるかも判りきつている。

「茶番は止めましょ。本日の『』用件は芸術賞についてですわね？ 異議申し立ては受け付けかねますけれど、それでも宜しければお伺い致しますわ」

たとえ信頼を置かれているとしても、一国の主に対する失礼な

物言いだらう。論も根拠もなく、ただの違和感による詰問なのだから。それを承知の上で

「 率直にお聞きます。ミクを芸術賞に推したのは貴女ですか？」

俺の单刀直入な文言に、女王は一瞬だけ目を見開いて、そして可笑しそうに笑った。

「ふふっ、驚きましたわ。それほど真っ直ぐに訊ねられてしまうとは思いもよりませんでしたから。わたくしのことを疑つていらつしやるのですか？」

会話の流れを止めることなく女王は自然な動作で席を立ち、俺に背を向けた。

「いえ、その……気分を害してしまわれたのなら申し訳ありません。ですが正直に言えば、奇妙だとは思っています」

「どうしてそう思われたか、なんて聞く必要はありませんわね」女王の手によって金装飾の格子窓が全開になると、あの日テラスで感じたものと同じような春風が吹きこんだ。黄金の艶髪を揺らし、俺の肌を撫で、何処かへと消えていく。

「賞の意義とは、どのようなものだと思われますか？」

振り向いて問う。声色からも表情からも意図は読み取れなかつた。説得ではなく、単なる個人的見解か。

少し考えて、言葉が纏まらなかつたので首を振つた。一言ではいえないとばかりに。

「 受賞者の地位を高め、その権威を広く世に知らしめる」とですわ。芸術賞の名によつて、歌姫として認知せん……あまりよろしくないことですけれど。精靈歌は心の声。神への贊美を主題とする聖歌とは違つて、貴族のあいだでは軽視されがちですわ。精靈歌に限らず、他の学問でも、興味のない分野に対して自分の眼を持つたない人々は多い。芸術賞という名だけで騙されてくれるなら……騙すと云うのは、偽物のようで歌姫に失礼ですわね。認めざるを得ない風潮を作れるのなら、それに越したことはないと。そういう

」とです

女王は鈴を鳴らして世話係を呼んでから、対面のソファに身を委ねた。手際に無駄なく、茶と菓子の用意がされる。背後で扉の閉じた音がして、お互に一息ついた。

「あの子を賞に推したのか、といつ詰問でしたら『いいえ』と言つて逃げることができます」

自嘲のため息を吐きだして、女王は続ける。

「ただそれでは不誠実ですね。わたくしは『対象は個人でなくともよいのではないですか?』と進言しただけですわ。狭義で不特定多数の集団、広義で遺跡や不詳の作品、それから ボーカロイドでも。歴代の芸術賞と比較して、芸術協会での評価はそれほど高くありませんでしたけれど。精靈を再現できたという事実だけでも、歌姫としての可能性だけでも十分だろうと、そう判断なされたのでしょうか?」

「……わかりました」

わかつてしまつた。女王が俺に解らせたのだ。

この一年、初音ミクが音楽業界を席巻していたことは間違いない。各賞の時期が来るたびに、話題の中心にいたのは彼女だった。だが賞を贈るべき対象がいなかつたのだ。

歌姫計画の発案者である女王がいる。機械工学の分野ではあるが、歌声の基を作つた開発者がいる。直接プロデュースを担当した俺がいる。しかしそれは「初音ミクという芸術品」に関わる人間がいるだけで、アーティストではなかつた。

初音ミクが各賞にノミネートすらされないことで、大衆の不信感は募つていつた。どんな偉業を達成しても、人間ではないから賞を贈ることができない。これまでの各賞の担当者が抱えたジレンマだ。そういう意味で、各賞にも影響を与えるだろう女王の鶴の一聲は、待ち望んでいた唯一の解決策だった。

初音ミクに賞を贈ることができる。何か賞を贈らなければならぬ。賞の意義について、歌姫として認知させる風潮を作れると女王

は言つたが、まさにその風潮を作りだしたのだ。

「わたくしを恨みますか？」

唐突に毀れた言葉。物思いから我に返ると、フィーネリアの太陽と謳われてゐる女王が、寂しげな微笑を浮かべて俺を見つめていた。「一人では出来なかつたこと。あの子を成長させ、歌姫として使える状態に仕上げること。貴方は期待通りの いいえ、それ以上の役割を果たしてくれました」

女王は取り繕うことを止めた。否、これは信頼だ。そう思い直すと同時に、歌姫計画が手の届く範囲を超えてしまつたことを自覚した。

この一年、歌姫計画については調べていた。王宮の内部情勢も気には、不思議なことに下院議会によつて支えられている。権力や欲望が渦巻く王宮で、まるで台風の目にようつて曇りなく在る女王を支持したいという民衆の声が、大きな力となつてゐるのだろう。それでも女王にとつては、もっと近くに味方が欲しかつたに違ひない。想いを共有し、実行することができる 願いを叶えてくれる そんなん存在が。

「ここから先、俺や望は女王の駒でしかない。だがそれの何が不満だらうか。クリエーターは何時だつて使われる立場だ。俺たちは芸術の原石を磨くだけ。実際に輝くのはアートであり、アーティストなのだ。想いに共感できるなら、ミクが輝いてくれるなら、それでいい。

「……いいえ。一年前は応えられませんでしたが、いまの俺には貴女の信頼に応える準備と覚悟があります。その前に、ひとつ質問してもよろしいでしょうか？」

「ええ。なんなりと」

「歌姫計画の結末は何処にあるのですか？」

きつと女王の脳裏には描かれているであろう未来。ふたたび精靈歌が聴きたいと、そう願つた先に何があるのか知つておきたかった。

「……世界平和、と言つてしまつと笑われるのかしら。一度とクレス公國の悲劇を起こさないために、この国のような芸術による幸福を皆に感じて貰いたいと。主としては似つかわしくない世迷い言を、本氣で想つているだけですわ」

「他に政治的な方法もあるように思えますが、どうして芸術をいえ、音楽を選んだのですか？」

「わたくしが音楽を愛しているから、こうの理由ではダメでしょうか？」

一年前と同じ答え。だがそれが純粹な真実だということを理解できた。だから

「……こんなとき、どうするべきなのか知りません。ですので、故郷の形式で失礼します」

「えつ？」

女王のもとへ歩み寄ると、おもむろに跪き、左手を取つて頭上に掲げ上げる。

「その崇高なる目的の達成のために、阻むもの全てを断ち切る剣となり、迫るもの全てを弾き返す盾となり、命ある限り貴女様にお仕えすることを誓います。フィオナ様」

面を上げた俺は、放心した様子の女王を垣間見た。目元を潤ませて、取られた手を大事に包むように右手を重ねてくる。

「……ありがとうございます。貴方の命、お預かりしますわ。何が起きようと裏切りません、絶対に」

### 【3・2】歌姫の意志 part・1

芸術賞の発表から数週間を経て、各界の著名人や貴族らを招いた受賞パーティが国民の休日を開かれた。芸術協会で先立つて執り行われた厳粛な授賞式とは違い、立食形式で舞踏会を兼ねた優雅なものとなつていて。

ダンスパートが一区切りしたところで、ミクがステージに上がった。例年では王冠付きの楽隊による演奏がパーティを彩るのだが、今年は音楽分野からの受賞があつたことで進行にも手を加えたらしい。

『ララララ、ラーラー、ララララ、ラーラー  
ララララ、ララララ、ララララーラー、ラララー』

有名なジャズバンドの演奏にミクが軽快な歌声を乗せる。この日のために新調したポップなナンバーだが、階下の反応を見る限り、初披露でも好評を得ているようで安心した。

そして人気の少ない一階脇からステージを眺めていると、赤ワインの注がれたグラスを片手に、黒一色でドレスアップした望が近寄ってきた。

「主賓サマが、こんなところで何してるのでなあ？」

「感傷に浸つてた……とも言つたら笑うか？」

「あつはつは」

「なんだそりゃ」「

せつかく会場の雰囲気に合わせて洒落た会話でもしようかと思えば、これだ。望にシチュエーションを気にするような乙女心はないものか。

「それにしてもまあ、よつやくここまできたつて感じね」

「……そうだな」

ステージに目を戻して肯くと、ふと笑みが零れた。ミクがバンドマンとアイコンタクトを取りながら、楽しげに間奏のスキヤット

を口ずさんでいる。

今日の本番を迎えるまでに何度かの打ち合わせとリハーサルを経ていた。これまで狭い世界で活動してきたミクだ。歌という形で想いを届けることはあっても、面と向かって言葉を交わした人間は少ない。人見知りというので上手く「ミクニケーション」が取れるのか心配でもあつたし、いつかのライブのような目に遭うのではないかとも危惧していた。

だが幸いと言つていいのか、女王の思惑どおり芸術賞の名には効力があつたようで、相手もプロであるから（内心の戸惑いはあるにしても）それほど抵抗なく「初音ミク」は受け入れられたようだつた。そしてなにより、ミク自身が俺たち以外の人間と交わす音楽を楽しみ始めたのは大きかった。

『ラララー、ラララララ

ラララ、ラララーラ、ラララーララ、ララララーラ』

真鍮の欄干に寄り掛かつて、グラスを傾けながらミクのステージを眺める。まるで巣立つ雛鳥を見守る親鳥の心境だ。

本当に、ここまできてしまった。はつきりとは解らない何かをやり遂げた達成感と、少しの寂しさが入り混じつた不思議な表情を、望と二人して浮かべていた。

「……これから、どうなるのかな」

望の言葉に不安の色はなかつた。ただ未知に対する疑問が口をついただけなのだろう。

「……さあ、どうなるかな」

答えを持たない俺は、ただオウム返しにそう言つしかなかつた。しかし望と違うのは、心の片隅に微かな不安が影を落としているのを、確かに認めていたことだつた。

### 【3・2】歌姫の意志 part・1（後書き）

ステージでミクが歌つた曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになられましたら、是非お聞きください。

『//ラクルペイント』

ニコニコ動画

http://www.nicovideo.jp/watch/sm1588476  
YouTube  
http://www.youtube.com/watch?v="n50JzBPYhNU

『ラーララー、ララーラー、ラーラ  
ラーララー、ララーラー、ラーラ  
ラーララー、ララーラー、ラーラ  
ラーララー、ララーラー、ラーラ』

バックミュージックはノリのいいクラブナンバーに変わっている。あるカクテルを題材にした、お洒落な一曲だ。パーティ用に甘めに仕上げたクローバークラブ ジンをベースとした淡いピンクのカクテル を曲の間中ウェイターが配り歩いていた。

ふと見覚えのある後ろ姿が目に付いたので、通りがかりにグラスを一杯貰つて足を運ぶ。純白に金刺繡のドレスが他の来賓客と比べて煌びやかだというわけでもないのだが、やはり威厳を纏つて彼女は佇んでいた。

「ごきげんよう、フイオナ様。一杯いかがですか」

「あら、ごきげんよう。ふふっ、意外ですわね」

振り向いてグラスを受け取った女王が可笑しそうに言うので、そこでようやく相当に気障なことをしていると気付かされた。先日の一件があつた後とはいえ、女王陛下に対して馴れ馴れしそぎだ。あまりの恥ずかしさに顔を赤くする。

「主賓席でお見受けしなかつたので、わたくしも探していたところですわ」

「どうもこいつは苦手で……」挨拶が遅くなってしまった申し訳ありません

「お気になさらないでくださいな。王宮からは身の回りの者以外に来ていませんし、無礼講で構いませんわ」

言われてみれば、内外を問わず大抵の行事で顔だけは見かける大臣たちと、今日は鉢合わせしていなかつた。息が詰まること請け合ひなので構わないのだが。

「珍しいこともあるんですね」

「ええ、まあ……」

「こちらも珍しいことに女王が口元をむる。

「どうかしましたか？」「

「……歌姫計画は王宮であまり歓迎されていないものですから、女王の困ったような笑みを見て、触れるべきではない話題だったのだと、申し訳なく不甲斐ない気持ちになつた。

「私利私欲のために芸術協会を懐柔した、だなんて噂まで……嘘八百というわけでもありませんから、否定もできませんわね」

「フィオナ様……」

「嫌ですわ、わたくしつたら。ごめんなさい。せっかくのお祝い事ですもの、暗いお話は止めに致しましょう」

主従の儀を交わした日以来、こうして女王と向かい合つことが多くなつた。人前では毅然としている女王が、弱い部分も本音で曝け出してくれるのは嬉しいことでもあるが、身分の違いゆえにどうしようもないことばかりで、歯がゆさを感じてもいる。俺に解決できる事柄など全くないと黙つていいだらうから。それでも、わずかでもいいから力になりたいと強く想つ。

「実際にご覧になって、どうですかミクは？」

俺の報告で話を聞いたり、ディスクで歌声を聴いたりしても、女王がミクと触れあうのは久しぶりのことだ。ここまで女王の目に留まるような舞台には立つたことがなかつたから。

「そうですわね……」

愛娘を見つめる母のように、女王はミクのステージを眩しげに見やつて笑顔で答えた。

「とても、成長しました。歌姫としての力は勿論のことですけれど、人間としてよく成長したことが伺えますわ。望さんのおかげでしょうか？」

「師弟というか、姉妹というか。俺よりも望のほうがマスターらしいですよ。あいつがミクを育てたようなものですから」「今まで振り返つて苦笑する。本当に俺は何もしていないな。

「姉妹…… そうでしたわ。今夜はサプライズを用意してあります。」

「どうぞ、期待くださいな。望さんにもよろしくお願ひ致しますわね」

何が「やうでしたわ」なのか解らないが、思い出したように、し

かしわざとりしくも感じる口調で女王が言つ。

「サプライズ、ですか」

「ええ。きっと喜んで頂けると思いますわ」

打ち合わせでは聞き覚えのない話で、心当たりはまったくなかつた。だがまもなく、俺たちは女王の意味深な言葉を理解することになる。

### 【3・2】歌姫の意志 part・2（後書き）

ステージでミクが歌つた曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになられましたら、是非お聞きください。

『クローバー・クラブ』

ニコニコ動画

http://www.nicovideo.jp/watch/sm1937053  
YouTube  
http://www.youtube.com/watch?v=D1FuDwJv5Vs

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8291e/>

初音ミクの物語

2010年12月5日19時40分発行